

深谷忠記



1913年(明治46年)生まれ。一六〇(一九三〇)年東京大学理学部数学科卒業。一九三五年「特人ウィルスを追え」で第三回サントリーミステリー大賞・佳作。

この「私の隠し主」を書く時期になると、毎年思い知らされることだが、なんて時の流れるのは早いのだろう！ 今年のように脚の不調に悩まされ、仕事らしい仕事をしなかつた年は、特に強くそう感じる。去年の暮れに「執行」が文庫になって以来、今年は形になった仕事がまだひとつもない。

現在、「ただ一度！」(去年予告した「血の連環」を改題)という作品を書いているが、まだ終わりが見えてこない。何しろ「脳力」が衰えてきている身には、単に頭で考えただけなのか、どこかに書きとめたのか、それともすでに原稿に書いたのか、がしよつちゆうごつちやになり、それを確かめないと先へ進めないからだ。それでも、六百枚(原稿用紙換算)近く書き進んだので、今年中になんとか第一稿を書き上げ、来年の夏頃までには刊行できたらいいな、と考えている。

逆立ち! という言葉である。半世紀以上昔の話なので、正確にこの言い方だったか、それとも類似の別の言葉だったかははっきりしない。だが、意味だけははっきりしており、「考える順序が逆だ——自分の頭で考えよ」という意味である。

言われたのは、高校のときの物理の教師、稲葉正先生。先生は、毎回自らガリ版刷りしたプリントを使って授業をされたのだが、前の週に配られたプリントには四半分を使って演習問題が載っており、僕ら生徒はその部分を切り取って、授業が始まる前に提出しなければならなかった。その設問の多くが「……を吟味し説明せよ」といったもので、僕たちは大いに苦しめられたのだが、解答欄に「……の定理により」などと書くものなら、先生の怒った顔が目に見えるような大きな赤字で「逆立ち！」と書かれた細長い答案が返された。その言葉は、今でも僕の中で生きている。